The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜良書紹介＞　語文　第9輯
Author(s)	
Citation	語文. 1953, 9, p. 35-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68432
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

良書紹介

高木市之助著

古文芸の論

笹月清美

国文学の研究の中、文献学的研究（本文批評、訓詁註釈その他いろいろの考証）の領域には学者も多く、業績も相当に出ている。しかし文芸そのものを的確に感受し、その本質や史的意義を生き生きと論ずることの出来る人は極めて少い。その中でも高木市之助先生が銀線のような感性と精緻な論証とをもつて古今独歩の仕事をしておられることは、ここに更めていうまでもない。『古文芸の論』は前著『吉野の鮎』に続く文芸論集であるが、その方法はいよいよ冴えて、縦横無尽の趣がある。

この書は二部から成つている。初めの部には、「文芸の技術的性格について」、「文芸の風土的関聯について」など十五篇の論文が収められており、国文学、乃至文芸一般の特質が種々の照明によつて明らかにされている。後の部には、「古代文芸と方法」、「古代文芸と社会」以下「志賀の白水郎」に至る八篇の論文が収められており、古代文芸、特に万葉集についての創見がいともあざやかに展開されている。

先生の研究の特色は、方法的であること、そしてその方法が純粋に文芸論的であることである。この書において先生はその方法を実践しておられるばかりでなく、又しばしば方法そのものについても論じておられる。先生によれば、国文学の文献学的研究は自然科学的方法によるものであり、文芸に即していえばあくまでも外証的であるに過ぎない。その外に、（或いは、それを超克して）、文芸にとつて内証的もしくは自証的な方法がなければならない。そしてそれこそ精神科学的というに値するものである。

先生はもとより自然科学的方法を軽視しもしくは無視されるのではない。それをしつかりと踏まえながら、そこから颯爽と飛び立つて文芸の界を遊泳されるのである。それなら内証的方法とは何であるか。感受がそれである。感受をおいて文芸を把捉する方法はない。従つて実証とはこの感受に客観性を与えることであり、自然科学的方法ももはやそのためのものに外ならないのである。

この感受に照応する文芸の側の特質として、先生は、形という概念を導入された。文芸は単なる思想でもなければ表現でもない。両者を総合統一したもの――形である。そしてその形を創造し、形成するものは技術（もしくは構想力）である。技術はもちろん技巧ではない。技術は時間と空間との綜合者であり、ロゴスとパトスの統一者であつて、根本的な芸術創造の過程なのである。

このような方法に貫かれたこの書は、国文学の諸作品、殊に万葉集について幾多の美しいリリーフを作りあげ、又多くの課題に対して独自の解答を与えている。たとえば、人麿に存する偉大なる形、――それを従来は彼のマンネリズム或いは職業的な宮廷歌人意識から来た形式主義などと説いていた。しかしそれは人麿のある質量感を説明することは出来ない。先生によれば、そこには等質的な自然人から個性的な個人が生まれて行く経過時代の民族のありかたがあり、人麿においてそのような社会個と個性とが調和されていて、換言すれば、彼にまだ叙事詩的な民族意識が残存していて、あのような素朴はつらつたる詩が生まれたのである。

そのほか、旅人と憶良の文芸意識を探求した「玉島川」「酒仙供養」「志賀の白水郎」など、二人の文芸意識の頡頏性を明らかにしているばかりでなく、また滋味尽きせぬ佳品である。（岩波書店刊　定価五八〇円）

岡保生著
尾崎紅葉
―その基礎的研究―

紅葉の輝かしい成功作「多情多恨」や「金色夜叉」等の前駆をなし、準備の過程に成った、幾多の小作品群に就いて、あらゆる角度から紅葉の試みの跡、努力の跡を探索し、紅葉文学成立の本質的事情を再現しようとしたのが、此の書である。

天保調の戯作から出発し、一九、三馬、春水らの影響下にあった彼が、時代の息吹に感じて想を凝らし、「小説神髄」に奮起して新分野を求め、西鶴からも種々影響を受けて、軈て明治廿年代の表現苦時代を深刻にくゞり抜け、修辞、文体、構想、内容、思想のすべてに試錬を経て、来るべき成功を準備したのである。

著者は、大は時代思潮から文壇的事情の考察を試み、小は彼の修辞、用字法に至るまで、綿密な調査を遂げ、本文の比較、構成の表示、字数句数の計算、諸研究家批評家の説の引用等、自在に資料を駆使しては、実に驚嘆に価する程明快な結論に導かれる。例へば用字法一つを見ても、其の統計に現れた歴然たる結果は、彼の文学そのものの発展と、完全に軌を一にしてゐる事を示すので、一字も忽せでなかった紅葉の作風が、実証される訳である。同時代の作家との比較が常に行はれてゐるので、紅葉の面目は躍如としてゐるし、年代的に紅葉自身の間での比較考察もなされてゐて、正に一目で隅々まで眼の届く標本を観る想ひがする。

種々の観点からする論文集の形をとり乍ら、究極目指す所に収斂して一絲乱れず、著者の堅実な学風を偲ばせる好著である。

（昭和廿八年四月　東京堂刊　B6二一八頁　定価二三〇円）

―鈴木―

久松博士他五氏共著
日本文学思潮
―史的展開―

日本文学史を思潮史的に叙述したもので序説を久松潜一博士、古代前期を太田善麿氏、同後期を秋山虔氏、中世を井本農一氏近世を宇佐美喜三八氏、近代を成瀬正勝氏が分担執筆。勿論執筆者により叙述法に相違はあるが、思潮史的な文学史として、高校以上の学生や、小・中学や高校の国語教授者にはよき参考書とならう。

（昭和廿八年六月、矢島書房刊、A5三二〇頁。定価四八〇円）

安田章生著
新古今秀歌

新古今集はいろいろの理由から、今日なほ十分に理解されてゐない歌集であって、新古今集といへば、技巧に過ぎた、現代では価値のない歌集であると思ってゐる人も多いやうであるが、混乱した時代に虚無の心を支へた新古今集の歌には、それとして無類の美しさがあり、その美は現代人にも顧みらるべきである、といふ考へによって新古今集全二十巻の中から、著者が秀歌と思ふ歌三百五十四首を抄出して評釈を加へ、各歌の作者のことや、関係事項なども簡潔に附記したものである。もとより一般人の教養として書かれたものであるが、新古今集の研究者でもあり、現役の歌人でもある著者の筆によって成ってゐる所に、自然本書の特性も見られ、その解説や鑑賞には、国文学研究者も得る所が少くないであらうと信ずる。巻初に「新古今集について」といふ一文があり、巻末に所収歌の初句索引がついてゐる。

（昭和二十八年四月三十日、創元社刊、B6三二八頁、三五〇円）

―宇佐美―